

大阪消防



特集 令和7年度 消防局職場活性化推進事例発表会

緊急消防援助隊 NEWS

令和8年度大阪市消防局運営方針

新たな時代にふさわしい人材マネジメント

令和8年

4

No.913

月号

CONTENTS

大阪消防 4

表紙：消防車と桜

01：コンテンツ／災害概況

02：特集 令和7年度 消防局
職場活性化推進事例発表会

08：ケイボウタイムズ

10：明日に備えて過去に学ぶ

11：緊急消防援助隊 NEWS

12：【職務】令和8年度 大阪市消防局運営方針

14：【職務】第73回 消防職員意見発表会

16：新たな時代にふさわしい人材マネジメント

18：No more！事故

19：ココ改善！

20：実録！！調査鑑識

22：We are Rookies！

24：大阪の消防NEWS

26：令和7年度 大阪市消防局実務研修レポート

28：落語DE火の用心

30：ふるさと日記

31：人材育成のヒント

32：自衛消防隊紹介／女性防火クラブだより

33：現場に活かす！救急救命士国家試験問題

34：救急いろは

36：【職務】特区民泊受付終了！
消防法令適合通知書の様式が変わります！

38：こんな声届いています

39：親睦会だより

40：救急安心センターおおさかだより／編集後記

大阪市の災害概況

◎火災概況

	建物火災				小計	車両	船舶	爆発	その他	合計
	全焼	半焼	部分焼	ぼや						
2月中件数	3	0	6	43	52	6	0	0	9	67
令和8年 2月末累計	5	4	21	85	115	10	0	1	14	140
令和7年 2月末累計	4	4	37	73	118	5	0	0	16	139
累計比較	1	0	▲16	12	▲3	5	0	1	▲2	1

◎救急概況

	救急出場
2月中件数 (概数)	19,629
令和8年 2月末累計	41,696
令和7年 2月末累計	45,112
累計比較	▲3,416

◎火災・救急以外の消防活動概況

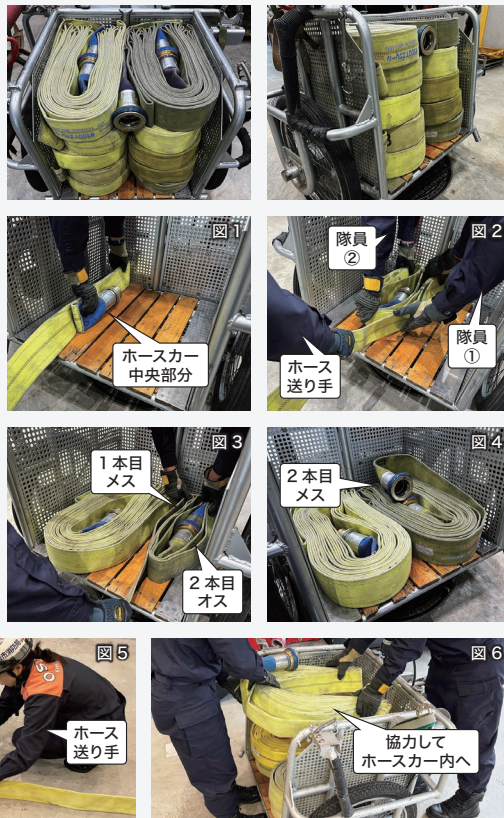
	救助活動	危害排除	水防活動	その他
令和8年 2月末累計	756	266	0	210
令和7年 2月末累計	803	234	0	228
累計比較	▲47	32	0	▲18

積載方法について

ホースカー内のホースを、従来のように短くアコーディオン状に折りたたむのではなく、全てのホースを菊水巻きの形で作成し、結合された状態で積載する方法です。横に2本×5段で、従来と変わらない10本のホースを積載することが可能です。もちろん、全て結合されているので、ホースカーを曳行するだけで連続したホース延長が可能です。

積載する際の具体的な方法としては、まず積み始めとしてホースカーの中央部分やや左(右)寄りにオス金具を配置し、送り手1名とカップリングの左右に1名ずつの計3名で、ホースカー内で菊水巻きの形に送り込んでいきます(図1、2)。1本積み終わったら、奥側にメス金具、手前がオス金具の形で2本目と結合し、1本目と同様に積み込んでいきます(図3)。2本目が積み終わったら、その上段奥側にメス金具を配置し、3本目、4本目と順次積載していき、10本積み切ります(図4)。

上記以外の方法で積載する例としては、ホースカー外の地面で菊水巻きを2名で作成し、協力してホースカー内へ積み込む方法もあります。(図5、6)



積載方法のコツ

ホースカー奥側はメス金具のはかまが折れない位置、手前側もオス金具のはかまが折れない位置で菊水巻きを作成するとちょうどいい長さになります。これさえ分かっているれば、ホースカー外で作成するときに1本のホースで両金具を結合して菊水巻きの長さを測り、長さのガイドなどを使用することなく同じ長さの菊水巻きを作成することができます。

この方法は、前述のとおり長さを測るガイドを作成する必要もなく、特別な器具も使用せずに工夫された積載方法であるため、金銭的コストが全くかからず、どの隊でもすぐに始めることができます。

その他積載アレンジ

左右それぞれの下から5本を縦に積載し、右列と左列のメス金具がそれぞれ最上段にくるよう積載しておくことで、木造密集市街地火災での到着時黒煙ありなどの明らかな炎上火災の際に、5本分(100m)までの距離であれば同時2線延長が可能な積載方法へ変更することもできます。(1線延長のときにはどちらかの列だけで延長していき、5本延長後は次列最上段の6本目と結合する手間はあります。)

地域特性を考慮するなど、小隊によって使いやすいようにアレンジしていただければと考えています。

さいごに

何十年と変わってこなかったホースカー内のホース積載方法を変えることに、不安を感じる方も多いかもしれません。しかし、1度やってみていただければ、とても簡単かつ非常に便利なのことがわかっていただけるはずです。

ホースカー以外でも、ホース積載、延長方法には無限の可能性があるので、既存のやり方にとらわれず、今後も火災現場での安全、確実かつ迅速な活動を目指して、訓練と思案を重ねていきます。

令和7年度

消防局

職場活性化推進事例発表会

2025.12.16

令和7年12月16日に開催された、令和7年度消防局職場活性化推進事例発表会の様子をお届けします！本年度は121事例の応募があり、その中から書類選考を勝ち抜いた8事例について発表が行われました。見事に入賞に輝いた事例、惜しくも入賞を逃してしまった事例、すべての事例が素晴らしいものばかりでした。今回の特集では、掲載の二次元コードより、各事例の発表の様子を動画で視聴いただくことができます。ぜひご覧ください！

最優秀賞

ホースカー内ホースの安全・確実・迅速な搬送が可能な積載方法の考案について

浪速消防署 立葉 ST109



発案の経緯

火災現場においてほとんどの消火隊がホース延長に活用するホースカー。しかし、大阪市内の狭い路地の多い木造建築物密集市街地や、高層建築物が多く建ち並ぶ繁華街や都市部の火災では災害点直近や火点階までホースカーが進入できず、ホース延長のためにホースカー内の65mmホースを何本も搬送することがたびたびあります。そんな時、短く折り返して複数回たたまれ、アコーディオン状の束になっている従来からの積載方法では搬送に苦慮することも多く、ホース延長に時間を要してしまうことも。

もっと、安全、確実かつ迅速にホースを搬送、延長できれば…そんな火災現場最前線の隊員の思いを叶えるため、何十年と変わってこなかったホースカーへのホース積載方法をリニューアルすることを思いつきました。



従来の積載方法

優秀賞

ついに実現！年間 700 時間以上の効率化に

平野消防署 DX推進会議 + 1



DX推進会議+1とは

平野消防署では、「警防」「予防」「地域」「管理」といった各担当の垣根を越え、DXによる業務改善を目指すプロジェクトチーム「DX推進会議」を設置しています。このDX推進会議に、大阪市の生成AI「Oasis」が加わり、チームがより一層強化されました。

DX推進会議は主に予防担当が中心となり、他の担当と連携しながら業務改善を幅広く推進しています。今回の事例では、Excelでの新しい調査様式作成に苦戦していた警防担当の課題をDX推進会議のメンバーが発見し、DX化を進めた結果、業務改善に成功しました。



使いやすい調査様式を目指して

私たちDX推進会議は、Wordでもマクロが使用できることを認識していたことから、誰もが使いやすい調査様式を実現するためには、Wordのマクロ機能が不可欠だと考え、Oasisの支援を得ることにしました。具体的なコードの知識は十分ではなかったため、Oasisに質問を重ね、デバッグ作業を行いながら、全員が使いやすい調査様式を完成させました。

完成した様式には、2枚目以降の自動枠組み挿入機能や改ページマクロ、写真挿入マクロ、インデント調整マクロ、数字の全角・半角チェックマクロ、日付等の入力補助シートなどの機能が搭載され、従来では手間のかかっていた作業が簡素化・自動化されました。

さらに、平野消防署から調査鑑識を通じて、他の消防署にも新しい様式を共有していただき、現在では多くの署で活用されています。その結果、年間 700 件以上作成される調査書類の作成効率が大きく向上しました。

業務改善に必要なものとは

私たちDX推進会議が考える業務改善のポイントは、①問題をどのように発見するか、②その問題を解決できる人をどのように見つけるか、の2点に集約されます。

問題発見のきっかけは、「常識を疑うこと」です。これによって、見落としがちな課題にも気付くことができます。ただし、問題を発見するだけでは業務改善は進みません。課題解決のためには、解決できる人材を見つけ、発見者と解決者をつなぐ仕組みが必要です。自分だけでは解決できない場合も多いため、組織横断的な協力体制が不可欠だと考えています。

担当や署の垣根を越え、署単位ではなく「大阪消防」全体として、さらに風通しの良い職場づくりを目指していきます。

優秀賞

危険物算定アプリについて

予防部予防課 査察担当



危険物算定アプリとは

「危険物算定アプリ」(以下「アプリ」という。)とは、kintone により特別査察隊が開発したアプリです。このアプリは、危険物の「迅速で正確な算定」ができるため、危険物無許可貯蔵事案等において適正な違反処理を実現し、違反是正、火災予防に役立ちます。

従来の算定との比較

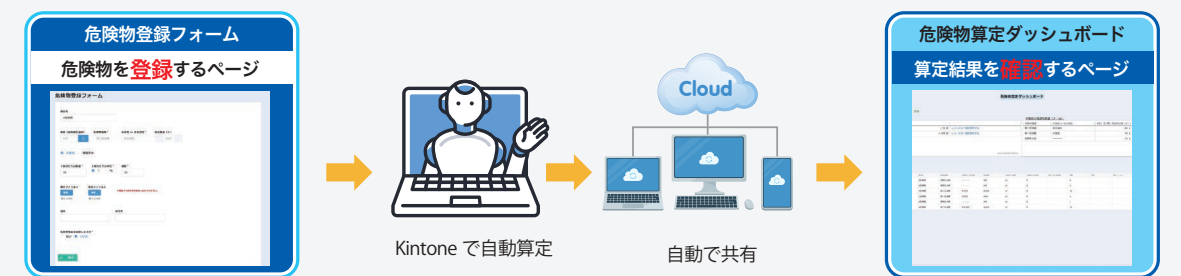
従来は、紙とペンを使用していましたが、アプリではタブレットから入力することで算定できるようになるだけでなく、自動で消防署等へ算定結果を共有することができるようになりました。



アプリのシステム

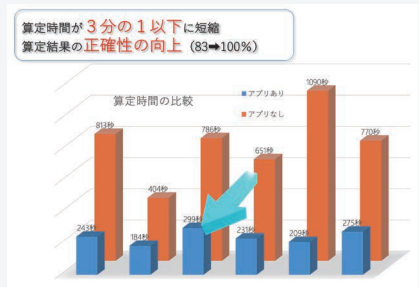
アプリは、危険物を登録するページと算定結果を確認するページから構成されます。

危険物を登録することにより、kintone で自動算定され、その結果を消防署、消防局及び立入検査現場から確認することができますという仕組みです。算定結果には、危険物の倍数、種類別の数量が表示されます。警告、命令等の判断に活用だけでなく、算定結果をそのまま命令書に活用できるため、迅速な違反処理ができるようになります。



アプリの効果検証

検証の結果、「算定時間が3分の1以下に短縮」及び「算定結果の正確性が向上」が証明されました。



アプリを広げるために

アプリは、令和7年3月に発出され、多くの消防署でアプリを活用した模擬検査を実施しているほか、令和7年5月には、初めて危険物算定アプリを無許可貯蔵事案で活用し、迅速な命令を実施、早期の違反是正につながりました。

また、消防庁「消防防災科学技術賞」入賞、全国消防協会「消防機器の開発」優良賞、消防局「職務研究論文」優秀賞を受賞しています。今後は、危険物算定のDX (デジタルトランスフォーメーション) 化を全国へ広げ、火災予防を実現していきたいです。

フレキシブル予防

北消防署
フレキシブル予防 TF



訓練や研修で警防担当の配置人員不足時に、予防担当職員が一時的に受付や消火隊等に乗り組むことはどの署でもよくあることだと思います。その逆パターンとして、繁忙期の予防業務混雑時に消防用設備等点検結果報告や防火管理者の選解任等、軽易な届出の処理を待機中の警防担当職員に手伝ってもらう取組です。来庁者の待ち時間軽減や予防業務の効率化、警防担当職員の予防業務経験の積み重ねにもつながります。

攻撃的安全管理により、災害現場での事故をゼロに

阿倍野消防署
2部阿倍野特別救助隊



自隊の職員負傷を契機に、事故防止には、事後ではなく事前、他人事ではなく自分事として捉え、強制的に安全を意識させる仕組みが必要であると考えました。そこで、些細な危険でも積み重なると事故につながるということを示したマップや、自隊の活動の危険度を振り返る確認表を作成しました。これらを平時から活用し安全管理に関して対等に話し合うことで、ヒヤリハットが顕在化され、安全を最優先する職場風土が醸成されました。

あなたの思い（アイデア）を形に

今年度も各所属から100件を超える応募をいただき、その中から発表会に出場した8事例をご紹介します。幅広い視点からそれぞれの課題解決に向けた工夫が随所に凝らされており、とても見ごたえのある発表会でした。企画課の庁内ポータルでは、発表会の動画に加えて、全応募事例を掲載しています。発表事例以外にも職員の皆さんに知ってほしい取組がたくさんありますので、是非ご覧ください。今後も各所属の良い取組が、消防局全体に広がるよう、サポートしてまいります。皆さんも良いアイデアが浮かびましたら、是非発信してみてください😊

【消防局】事業案件・見積共有アプリ

企画部人事課
チーム・リクルーター



各担当者が予算要求や契約事務を進める上で役に立つツールとして、事業案件情報を容易に共有することができるkintoneアプリを作成しました。本アプリでは、見積業者、業者担当者・連絡先、仕様、単価、見積価格を事業案件ごとに共有することができます。結果、各担当者の情報収集にかかる時間短縮による人件費削減、有益な情報の共有による適正な予算要求・予定価格の設定等、消防局を横断した効果的な事務推進を実現することができます。(現在は、課内のみで運用)

人を想い行う業務改善
「自衛消防協議会」

西淀川消防署
地域防災力向上
プロジェクトチーム



消防職員なら誰しも、災害による甚大な被害に直面し、涙したことがあるのではないのでしょうか。地域防災力向上のため、合言葉は「後悔しない」「命を救う」「楽しく」です。今回の発表会での事例はその中の事業のひとつです。市民からの信頼、誇り、矜持、何よりも市民の笑顔に触れられる事業は、市民はもちろん、消防職員にとっても今必要とされる重要な職務であると考えます。数字に現れないため評価されにくいですが、参加した人だけが分かる達成感。問い合わせ大歓迎です。



消防局業務改善応援室
6代目室長 坂本 菜央

特別審査員賞

人材育成を主眼とした警防担当の立入検査改革

淀川消防署 十三橋人材育成チーム



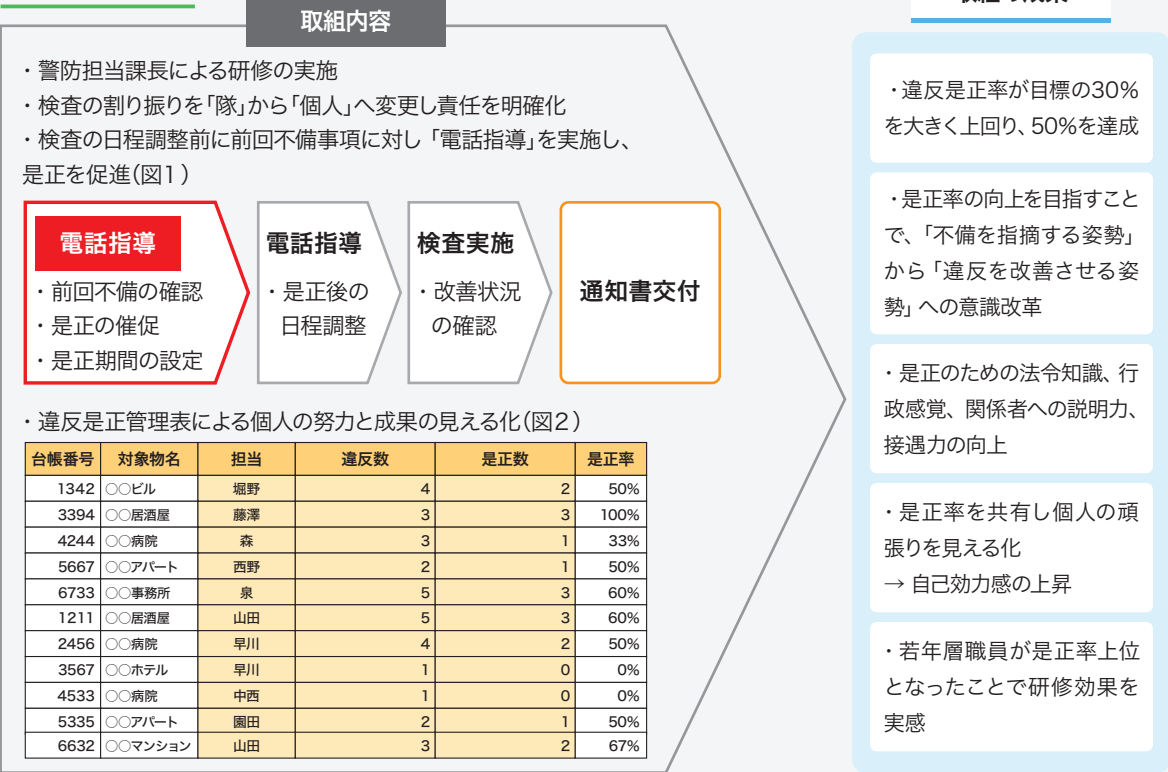
取組開始の経緯

人材育成には小さな成功体験の積み重ねが必要であるが、火災件数の減少により、災害現場において成功体験を得る機会が減少している。一方で消防への期待やニーズが増加する中、市民の安全のため、警防担当が実施する立入検査についても変革の必要性を感じていた。

改善すべき課題

警防担当が実施する立入検査では、違反の是正には踏み込めておらず、毎回同じような不備指摘を通知している現状がある。また、新任実務教育や予防研修で予防の知識を基礎から学ぶが、警防担当に戻れば知識、熱量ともに低下してしまう。そこで、実践的かつ能動的な立入検査の仕組みを作り、研修で学んだ知識を活用して成功体験を得ることにより、仕事への誇りとやりがいを醸成することとした。

課題への取組



今後について

淀川消防署では、本取組を単年度で終わらせることなく定着させることで、ワークエンゲージメントの向上につなげていくとともに、全市的にも本取組の展開を検討していただければと考えています。

ケイボウタイムズ

～警防課の「いま」を伝える～

第24回 大分市大規模火災 —全国消防長会調査団に参加して— 警防課〈水利〉

災害現場での活動を支える「警防部 警防課」。
「ケイボウタイムズ」では、毎号、警防課の各担当による「この時期だから伝えたい」旬なネタを掲載するほか、警防課が取り組む施策や事業についてお伝えします。

はじめに

令和7年12月24日に、全国消防長会調査団の一員として、大阪市消防局から2名の職員が派遣され、大分県大分市佐賀関の火災現場及び大分市消防局を視察しました。

今回の調査は、「大規模災害、特殊災害等発生時における調査団派遣規定」に基づき、社会的影響のある災害発生時に調査団を派遣し、消防機関としての災害状況調査を行い、その教訓を消防行政に反映させることを目的として行われたものです。

ここでは、災害対応にあたった大分市消防局による活動をお伝えするとともに、本派遣団による調査結果をご報告します。

災害概要（令和8年3月4日時点）

令和7年11月18日（寛知17時43分）、大分市佐賀関の市街地で発生した火災は、北西からの強風により佐賀関田中地区に大規模な被害をもたらしました。

その後、さらに隣接する山林、市街地から南東方向に約14km離れた^{つた}蔦島（無人島）に延焼。半島側の火災は同年11月28日13時30分（火災発生から10日後）、蔦島を含む全域は12月4日14時（火災発生から16日後）に鎮火しました。

火災における被害は、人的被害として死者1名（70歳代男性）及び負傷者1名（50歳代女性）、建物被害として焼損棟数196棟、焼損範囲約63,937.97㎡（林野及び蔦島を除く）におよびました。

大分市消防局による活動

大分市消防局からの回答をもとに、本火災の活動をまとめます。

■火災発生時の指令センターの対応について
当初、7名で対応したところ、続報が多数のため14名体制に拡大し、指令業務を行った。

■出場体制

第一出場で消防車8台・救急車1台が出動。第二出動で消防車2台が出動。

■火災の状況について

強風の影響により東・南側に延焼が広がり、鉄筋建物も熱で変形、延焼阻止線も飛び火で突破された。人命救助を最優先とし、延焼防止や避難経路の確保に努めるも、熱風により燃焼建物に近づけず、活動は困難を極めた。

■消火活動について

消防水利は消防車を消火栓（2基）に部署し、あわせて小型ポンプ10台を沿岸部に配備して、海水により消火活動を実施した。

また、ドローンで熱源を確認し、ヘリによる消火活動を実施。

■消防団の活躍について

消防団による住民への避難誘導が消防機関からの指示以前に行われたことは、非常に助けられた。

日頃からの消防団と地域住民同士の繋がりが大切であることを再認識するとともに、防災意識普及のための予防活動の重要性を再認識した。

調査結果

大分市佐賀関で発生した火災は、降水量が少ないうえに強風という気象条件も重なったことが、木造密集地域において大規模火災となった一因と考えられます。延焼拡大の要因として、燃焼建物から道幅の狭い道路への熱風が消防隊の活動の障害となり、さらに、飛び火による火災が複数個所で発生し、消防力が分断され劣勢になったと考えられます。

そのような火災の状況下においても、日頃から培われた地域住民の共助により声を掛け合い、避難誘導が行われたことで、多くの命が救われたことは、不幸中の幸いだと感じました。

おわりに

大分市は全域が市街地であり、消防水利の配置や道路の整備状況が大分市とは異なるものの、強風による飛び火が発生し、複数個所での火災により消防力が分断され劣勢となれば、大規模な火災に発展する可能性は否定できません。今後、当局においても、「大分市大規模火災全国消防長会調査団調査結果報告書」の内容を勘案しながら、警防マニュアル等の改正を進めてまいります。

消防水利（大分市佐賀関）



消火栓（地上式）



消火栓（地下式）



小型ポンプによる消火活動に使用した漁港

大分市消防局



指令センター

被害状況



火元建物



火災により溶融した鉄筋



全焼した東林庵の跡地



救助先行車 CC9

無線呼出名称：大消救助 9



特徴

浸水地や泥濘地、道路損壊地などにおいて、早期の情報収集や救助活動における初動対応を目的とした小型のオフロード型4輪駆動車。車両後部のラゲッジスペースは、リヤシートを倒すことでフルフラットとなり、資器材の搬送も可能となります。

任務

原則として、CC9は緊急消防援助隊大阪府大隊の統合機動部隊として出動します。これまでは当局保有のオフロード型四輪駆動車（以下「CC7」という。）に5名が乗車していましたが、今後はCC7に3名、CC9に2名乗車し分散して出動します。

統合機動部隊

大規模災害が発生した際、消防庁長官の出動の求め又は指示があれば迅速に出動し、被災地において消防活動を緊急に行う。また大阪府大隊が後続する場合に、大阪府大隊の円滑な活動に資する情報の収集及び提供を任務とする。



CC9の後部フルフラット状態



CC7



出初式で走行するCC9

導入の経緯

令和6年能登半島地震に出動した全国各地の緊急消防援助隊は、落石や地割れなどによる道路幅員の狭隘や、道路損壊などの発生により、大型の救助工作車などでは被災地への進出が困難な状況でした。

当局においても、進出が難しい状況ではCC7などへ乗り換えて進出し、活動を行いました。

この教訓を踏まえ、消防庁は機動性の高い小型車両（無償使用車両）を全国29の消防本部に新たに配備しました。当局でも、救助先行車として活用できるようになりました。

令和8年3月には新たにもう1台の救助先行車と情報統括支援車が配備されました。今後の大阪消防にも登場予定です。ご期待ください！

今回のテーマは「切創」

（警防部司令課）

このコーナーでは、「安全文化の醸成と安全管理の徹底」を図ることを目的に、消火・救助・救急など過去の負傷事例を振り返り、事例からの学びについて紹介していきます。ここで紹介する内容が、皆さんの日々の活動に役立ち、プロフェッショナルとしての安全意識をさらに高める一助となることを願っています。

今回は、火災現場での「切創」について紹介します。

事例紹介

鉄骨造波板鉄板葺波板鉄板張一部スレート張2階建作業場、建850㎡延1,025㎡の内、2階60㎡焼損及び20㎡表面焼損した火災現場において発生。

救助隊員1名が当該建物2階の屋根上で、放水及び排煙のため、切断用資器材を使用して屋根材波板鉄板（トタン板よりかなり厚みのあるもの）を切断し、波板鉄板をとび口でめくり上げ、両手（消防手袋着用）で波板鉄板の切断面を保持し、さらにめくり上げようとしたところ、右手が約10cm程度横滑りし、消防手袋が破れて負傷（右手第二指切創（軽症））した事例。



【負傷場所の詳細】



【消防手袋の状況】

今回の負傷は、「アラミド繊維の消防手袋なら安全」という先入観により、とび口や万能斧などの資器材を十分に活用せず、鋭利な鉄板の切断面を手で直接把持して作業したことが大きな要因の一つです。

アラミド繊維は、耐熱性・耐摩擦性に優れ、切創や衝撃にも強い素材として広く認識されています。しかし、どのような条件下でも安全性を保証できるものではありません。手袋は経年劣化や損傷のほか、活動環境（濡れ、汚れ、油分、鋭利物の形状・角度等）の影響を受け、想定より防護性能が低下する可能性があります。

当局では、「消防隊員用個人装備に係るガイドライン」の改正を受け、消防手袋の仕様変更を行いました。火災現場等での使用において必要となる性能（耐熱性、耐水性、突刺抵抗、耐摩耗性）を検証したうえで改良し、操作性を維持したうえで性能が向上した消防手袋を導入しました。

一方で、装備の性能が向上しても、危険がなくなるわけではありません。装備の特性と限界を正しく理解し、危険を予測したうえで、資器材を用いて直接接触を避けるなど、より安全な手順を選択することが必要です。

今後は、日々の訓練と振り返りを通じて、装備の状態確認（劣化・損傷の有無）と、活動環境を踏まえた危険予測を徹底し、危険を回避できる行動を定着させる必要があります。

ガイドライン改正後に向上した主な性能

- ・甲部分に透湿防水フィルムを施し、天井等からの熱水のしみこみ防止及び空気の層を増加させ熱伝導の遅れを実現した。
 - ・アラミド繊維の密度を上げ、掌部の「なめし革」を0.1～0.2mm程度厚くし、縫い方を変えたことにより耐久性を向上した。
 - ・面ファスナーを手首の内側に付けることにより、作業時の引っ掛かりを減らしている。
- ※保守管理を徹底することで消防手袋の劣化を抑えることができます。

さいごに

重大事故だけでなくあらゆる事故についても過去の事例から学び、災害現場での細心の注意と高い安全意識の積み重ねが、重大事故を未然に防ぐことにもつながります。

当局の重点目標に掲げる『安全文化の醸成と安全管理の徹底』のとおり、職員一人ひとりが安全への意識を高めて取り組んでいきます。